

Internationale Heinrich- Schütz- Gesellschaft

Sektion Japan

Newsletter

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

【電子版】

Nr.22

Juli.15.2018

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の歩み(12)

2018年6月末で設立53年目になる本協会の歩みは、本号をもって限りなく現代に近づきました。前号では2007年5月5日に、新体制、発足にあたっての、皆様方の御承認を得るための総会を開催した時点までを、お知らせいたしました。その後の重要なこととして、会員の皆様にお知らせすべき出来事は、初代会長・服部幸三氏が2009年10月8日に御逝去されたこと、それに関わり皆様方から賜りました御反応・御意見、本協会が早速に行わねばならなかった、様々な対処や処理に関わる点があります。なんせ事務局をお預かりして1年半、今にして思えば至らぬことの多かった未熟な対応振りに、不甲斐ない想いと失礼を恥じるのみです。しかし初代支部長の設立に対する並々ならぬ想い、その時代に事務局長を務められた二代目支部長・正木光江氏の不屈な御意志がなければ、本協会の歴史はありません。このことは改めて、「歩み」の最後となる次号でお話させていただきます。

さて今回は2018年4月5日に開催した総会、およびそこで決定したことについて、御報告させていただきます。

国際ハインリッヒ・シュッツ協会 日本支部総会・懇親会

日時：2018年4月5日(金) 18:30 - 20:30

場所：上野精養軒 3153 店

費用：2,000 円(飲食代)

小さな協会としては喜ばしい出席率ともいえましょう。お名前は存じあげているけれど、中々お目にかかることのできなかつた方、初対面ながら互いに近い関係にあると認識できる方々との出会いの会となりました。楽しい時はまさに一瞬のうちに過ぎ去るものです。再会を期してお別れいたしました。今回御参加が多かつた理由としては、お務めが学校関係の方が多いので、学期の切れ目で各自が時間調整しやすかつたこと、会場設定が上野駅の傍のレストラ

ンの小部屋の貸し切りで、御理解のもと融通をきかせたサーヴィスをしていただけたこと等が、あるのかもしれませんが。あまりきちんと取り決めもせず、皆様にアラカルトの中から好きな食べ物、飲み物を選んでいただき、アット・ホームな雰囲気いたしました。委員の中では、そのようなやり方では会計処理が難しいとか、失礼ではないか等の考えがなかった訳ではありません。開催にあたっての準備も簡単で、御出席の皆様からは、今後もこのような気楽なやり方で、もっとしばしばお目にかかりたいと喜んでいただきました。

さて総会を開催しなければならない大切な懸案事項は、支部長交代でした。正木支部長は、2007年5月から副支部長(実質的には支部長代理)、2009年からは支部長としてお務めくださいました。それ以前の事務局長の時代を含めると、まさにその人生の大半を日本支部のためにお尽しでした。正木前支部長は非常に責任感の強い方です。2007年から事務局に入りました筆者を、本部の皆様にご引き合わせくださるために、ハンブルクで開催されたシュッツ・ターゲにお連れくださいました。支部長に就任されると、できうる限りの御都合をつけて大会に御出席なさいました。それは体力的に大変な御苦労であったはずですが、この状況がいつまで可能か、また支部長の職務が全うできるか、お会いする度に支部長の交代をお願いしたい、との打診をいただきました。しかし交代後は、支部長はどのようなお立場になるのでしょうか。まさに本協会を愛し、その将来を思って、存続のために楯となって御心配りをなさってくださいました。

本部のホームページをみていましたら、名誉会員が数名おられることに気が付きました。その中には他支部の支部長、長らくの会員等のお名前、前事務局長フレーリヒさんのお名前もあります。私は意を決してフレーリヒさんにメールを差上げ、日本支部の状況、正木支部長の御献身に対し、日本支部メンバーが感謝を表したい旨をお話しました。フレーリヒさんは、同感なさると共に、自分に協力できることは何でもいたしましよと、お申し出くださいました。早速会長ヴェルベック氏にお計りくださり、他の委員の方達からの御同意を得ることができました。それをフレーリヒさんは、私とふたりだけの「サプライズ」にしましよ、と御約束くださいました。そして昨年マールブルク大会の総会において、多くの出席者から暖かい拍手をいただいて、この栄誉が正木会長に伝えられました。フレーリヒさんも、「皆様のフレーリヒさんの夫」と自己紹介される素晴らしい旦那様と御一緒に、その場に同席してくださいました。日本支部の存在を絶えず心にかけてくださった、前事務局長には遠方から心の中で、ありがとうございます、お健やかこと申し上げるのみです。

さて正木支部長は、本部から名誉会員と称される立場を得られました。責任感からではなく、楽なお気持ちになられた正木さんと、御一緒に大会に参加できる日を、私も待ち望むようになりました。正木前支部長は私が働きやすい方にお声をかけて、御一緒に後を引き受けて欲しいとのお気持ちでした。そこで白羽の矢をたてたのは、木村佐千子さんです。バツハ研究家であり、獨協大学でドイツ語・ドイツ文化の教授として良いお働きをしておられます。バツハ研究を深めるためにも、シュッツ、ルターと遡って勉強したいとの想いをお持ちで、喜んで協力したいとのお気持ちをお示しくださいました。他の委員は皆様、継続してお務めくださるとのこと。このような腹案をもって、当日は総会に臨みました。皆様方から自由な御意見をいただくというより、この腹案をお了承いただけないかという進行でした。このような小規模な協会にあっては、組織の人員構成を云々するより、皆様の御気持ちを活かして、実務に励むことが大

切ではなかろうかと考えたからです。幸い御賛同をいただきましたので、後継者として仕事をしてくださる方が見つかるまで、以下の布陣で協会の更なる発展のために努力いたします。

なお本来ですと、支部長としての就任の御挨拶をするべきかもしれませんが。しかし気持ちの上では正木前支部長を顧問と仰ぎ、皆様方と時々お目にかかり音楽のお話し、またお気に召した新譜のことなど紹介しあえる支部であれば、幸いと考えています。皆様方の純で率直なお気持ちには、心打たれるものがあります。シュッツを研究対象とする音楽学者は、皆様方のお気持ちを真摯に受け止め、学ばせていただきたいと思います。私が許されて支部長として働く間に、さらに合唱団で歌っておられる方、バロック音楽を好んで演奏される方、専門に研究される方も愛好家の方も、分け隔てなく御一緒に語らい、できれば共に大会に御出席し、シュッツの足跡を辿っていただければと願っています。

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部 新役員

支部長 荒川恒子

事務局 庶務 木村佐千子

会計 山下道子

広報 佐藤 望

会計監査 寺本まり子

さて今回総会のお知らせに対しお返事をいただいた中に、小史と関わることをお知らせくださった方がおられます。まずは姫路にお住まいの高井雅敏さんです。会員数84名を誇った1975年の名簿に、姫路にお住まいの方が4名おられたのです。東 漸、浦野泰樹、高井雅敏、藤尾昭各氏でした。姫路にはどんな動きがあったのかしら、比較的小都市に何故これほどのメンバーが、また皆様はお知り合いであったのか等々、唯一現在まで会員である高井さんにお尋ねしてみました。律儀にいつも直ぐにお返事をくださる高井さんなので、間が空いたのをちょっと心配していました。はたして年初めから体調を壊しておられ、病床でも私の質問を気にかけておられたのです。次のようなお手紙をいただきました。

「シュッツ協会入会の動機は、特典のLP 一枚を送付いただけることでした。クラシック音楽を聴き始めて、一曲でも多くの曲を、一枚でも多くのLP を聴きたいという思いでした。当時グラモフォンやアルヒーフの輸入盤を自由に買える懐具合ではありませんでしたので、一枚でも入手したい一心でした。・・・私が利用していた駅前の小さなレコード店でよく顔を合わせて、クラシック・レコードの情報を教えていただくようになった年輩のクラシック・ファンの方々と、時々喫茶店へ誘われてお喋りすることがありました。恐らくその内の何人かがシュッツ協会のメンバーだったのかと思いますが、協会に関する話はしたことがありません。自分はそのような仲間の最年少でした。LP からCDになり、ハイレゾへと変化するなかで、最近私あまりレコード店へ出入りしておらず、二か月に一度、ハガキで注文したCD を数枚取りに伺う程度です。私が知っている方々は、いまはもう殆ど他界されていると伺っていますし、レコード店でクラシック・ファンの方々にお会いすることは、この二十年くらい全くありません。レコード店の店主の方も代替わりで、身体も御不自由と以前伺ったことがありました。当

時クラシック・ファンの方とお会いし、話といえば新譜のLP レコードのことばかり。シュッツ協会のことは話にでませんでした」とのこと。高井さんは上記の方々と、お目にかかっておられたのでしょうか。いずれにしても姫路で、新譜について語り合うお仲間がいらして、楽しい時間をお持ちであったことは確かです。

次に原稿をお寄せくださったのは、大阪にお住まいの榊田武志さんです。手広く電気・事務用機械・器具を扱う会社の代表取締役として、お忙しくなさっておられます。しかし出勤なさるとまずメール・チェックをなさるのででしょうか。差し上げるメールに直ぐにお返事を返してくださいませ。その文章のスタイルからは年輩の紳士という印象を受けました。実直な御仕事振りを示すように、礼儀正しい文章をお書きになるからです。しかし私よりも若く、まさに働き盛りであることをお教えいただきました。お忙しいので、いつもドタキャンせざるをえないということで、私は密かにドタキャンの方、かまわずに都合がいたら是非お越しく下さい、と申し上げていました。今回は東京方面へのお仕事を兼ねてお出かけくださり、ようやくお目にかかる機会を得ました。榊田さんは以前トルガウで大会が開催された時に、奥様孝行を兼ねて御出席を計画されたことがおありでした。マイレージが溜まったので、ふたり分の飛行機のチケットはすでに御入手。普段は外国に行けば工業地帯ばかり歩くので、トルガウと兼ねて御夫婦の旅行には、どのあたりが良いでしょうかとお尋ねいただきました。その時も残念ながらドタキャンの榊田さんでした。日に焼けてお元気に走り回る榊田さんと、シュッツ協会はどのようにして御縁を得られたのかしら、総会の席上でも少しお話をお聴きしましたが、是非もつとお願いいたしました。(荒川恒子)

シュッツと私

会員 榊田武志

シュッツという作曲家が嘗てドイツにいたと知ることになった機会は、今年の総会の自己紹介でもお話し申しましたように、昭和43年頃の日本グラモフォンが発売していたレコード・レーベル「アルヒーフ」の顧客向け会誌にて、日本ハインリッヒ・シュッツ協会の紹介と、服部幸三先生の事が記載されていた、添付の写しのような記事が最初の事と思います。正直なところ、音楽の専門家でもないので、バッハからさかのぼること100年前に作曲家がいたということすら驚きの感でした。このアルヒーフ・レコードを購入した最初の出会いは、当時通っていたレコード店、大阪日本橋のワルツ堂第1店の店長に勧められて購入した、ヘンデルの水上の音楽です。その瑞々しい煌めきの音楽を聴いて”おおっ”と、その音楽の響きに魅了されたことが、その入り口でした。確か、そのアルヒーフのレコードに「アルヒーフ友の会」への入会案内があったように思います。その会に入会したら、会誌が届き何冊かの中で上述の記事に出会ったのです。服部先生は当時、NHK・FMのバロック音楽の解説、紹介の番組に出演されていて、お名前は存じておりました。余談ですがその当時のNHK・FMは、まだ実験放送

から本放送に移行した段階であったころだと思います。

そして日本ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部への入会申し込みをしましたところ、正木先生よりお手紙を頂戴しまして、会の主旨や、パンフレット、また尾崎喜八先生の ” ハインリッヒ シュッツ “ の音楽への詩の写しも頂きました。すると今度は当時の西ドイツから直送便でシュッツ音楽祭の案内が毎年届くようになりました。ところが毎年届いたころには、既にその年の音楽祭は終わっている古新聞状態でした。またドイツから1枚のシュッツ音楽のレコードも届くようになりました。何年か続いたように思います。中にはレコードが輸送途中で反り返り、そのまま再生できないものもあり、懐かしい思い出です。このレコードの頒布も(無償でしたが) いつの頃かになくなってしまいました。

当協会に入会して既に40有余年経っていると思います。正直今までシュッツの音楽を何曲も聞き込んだわけでもなく、年数だけが経ってしまったという感じで、特に詳しいことでもなく専門的なことも分かりません。ただ深い精神性、何かしら引き込まれそうな怪しい?響き、決して壮大な大編成の音楽ではないが、心に響いてくる音楽と感じております。ドイツ語を理解できませんし、第2外国語としてまあ、レコードのジャケット・タイトルぐらい読めればいいわと、習った具合ですので歌詞の意味も全く訳文を読まない事には理解できず、唯々言葉も音として感じておる次第です。長い間の30年戦争による人的インフラの不足下での作曲、演奏という状況に研ぎ澄まされた孤高の音楽だと思って鑑賞しております。

私事ですが、シュッツの宗教音楽、またバロックの音楽、それ以前の音楽、その他の通常名曲等、西洋音楽を聴いておりますが、カトリックまたキリスト教関係の宗教との接点がある訳ではありません。高校が英国聖アンドリュース系のミッションスクールだった程度です。家は仏教融通念仏宗ですし、神棚には天照皇大御神を始め地神の龍神に至るまでお祭りしていますし、自身朝夕神前に祝詞、仏壇にお経を挙げて過ごしております。宗教観としては、神佛は全て一体の同じ方であると信じておりますので、形を変えたキリスト教であろうがイスラムであろうと、得体のしれない新興宗教以外は、同じ宗源であると確信しておりますので別段、シュッツの宗教音楽もカトリックミサ曲にも一切の抵抗がありません。大きく横道にそれますが私、実は神主の資格も持っております。この6月の10日には、いつもお手伝いをしております伊勢の国一宮、椿大神社(つばきおおかみやしろ)の御田植祭、またこの6月30日の夏越の祓いの下働き手伝いをしてきました。この神社は、地祇大神猿田彦大神の本宮であり、天の岩戸開きの舞で有名な、妻神の天鈿女大神(あめのうずめ)、この神様は芸能音楽の総神様です。毎年秋の大祭の10月11日には、京舞の人間国宝、井上八千代氏が神前で舞を奉納されます。(WEB: <http://tsubaki.or.jp/>) この神社は、米国ワシントン州シアトル、カナダに分社がございます。

そうそう、今月NHK・FMの6:00からの放送で1週間シュッツ特集がありました。ほとんどシュッツの音楽が放送されることが無いので珍しいことでした。今はゆっくりと音楽鑑賞とは行かず、車運転時に聞くのが多くて残念です。さあ今度こそ時間を作ってゆっくりと、シュッツの音楽でも聴きながら不埒に居眠りでもできれば、最高です。

弥、取り留めもない話にお付き合い頂きまして有難うございました。

今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。(終)

高井さん、榊田さんのお話から、LP時代の方にとって、音楽情報を得るために、街の片隅にあった実直なレコード店(この世代の者にとっては、レコード屋さんとかレコード店という言葉がぴったりきます)、音楽好きで博識な店主の存在が大きかったことを感じます。私の家の近くには、読書家のお店の人が、色々と教えてくれる本屋さんなどがあったものです。家族だけで切り盛りしている、小売り店の役割は非常に大きいものでした。

さらに総会欠席のお返事につけて、原田満さんがそろそろ身の整理を始めたいとのことで、退会をお申し出なさいました。

「今後とも、音楽を聴き続けることに変わりはないと思います。しかし「音楽をアカデミックに研究する」ということは、今後なさそうなので、退会を決意することにしました。最近では、オペラを聴くこともめっきり減り、クラシックの演奏会に行くこともまれになりました。宗教曲は、終演後の拍手を聞きたくないので、見送ることがほとんどです。現在、もっともなじみのあるのは、能です。数年前から、きものを着るようになり、歌舞伎や文楽に出かけることも増えました。」

残念なことですがこれも自然なこと。原田さんとは一度も直接にはお目にかかれませんでした。が、せめて「私とシュッツ」に関して御原稿を残していただきたいとお願いし、快くお送りくださいました。原稿をいただいてからビックリしました。原田さんはお住まいも御専門も、私と非常に近い所におられたのです。早速『オペラ放浪記』を読ませていただきました。私も若い頃、よく似た旅行をしたものでした。もっとも原田さんの精力的な動き、情熱には遠く及びませんが。ヨーロッパに御旅行なさる時は、旅行案内書としてもこのシリーズは大変役に立ちます。最近のヨーロッパのインフラは良くなりすぎ、のんびりした鈍行の旅が難しいかもしれませんが。(荒川)

私とシュッツ

会員 原田 満

この度、シュッツ協会を退会する決意をしました。これは、言ってみれば、終活の一步であるのかもしれませんが。

私がシュッツの音楽と出会ったのは、1980年頃だと思います。大学の第二外国語でドイツ語を選択し、勉強の意味も込めて、ドイツ語の使われている音楽を色々と聴いていました。勿論、バッハの宗教曲やシューベルトの歌曲も聴いていましたが、シュッツの音楽には、大きな衝撃を受けました。一言でいえば、「素朴な力強さ」となりますでしょうか。その頃、LPで、日本コロムビアから、CANTATEレーベルのエーマン指揮、ベーレンライター

(MUSICAPHON) のリリング指揮のシュッツ作品の録音が廉価盤で出て、次々と聴いていました。この時期と前後して、マウエルスベルガーの「ガイストリッヘ・コーアムズィーク 1648」(エレクトローラ EMI)「カンツィオーネス・サクレ 1625」(テレフンケン)、ヘンニッヒ

の「ガイストリッヘ・コーアムズィーク 1648」(ドイチュェ・ハルモニア・ムンディ)などのLPも入手して、愛聴していました。

大学院に進学し、美学を専攻しました。音楽を専門にはしませんでした。音楽美学には、興味がありました。私が履修した講座で、戸口幸策先生の西洋音楽史がありました。受講生が、テーマを決めて、自己の研究成果を発表する、という内容でした。私は、演奏家ならば、フルトヴェングラーやグレン・グールドなら、色々語れそうだと思いますが、授業の雰囲気から、「演奏家を選ぶ」というのは、不可のような感じを受けました(他の大学院生は、シューベルト、ドビュッシー、ベリオなどを選んでいました)。それで、作曲家ということから、私が選んだのが、シュッツでした。ゲオルギアードスやエッグブレヒトなどの研究を参考にし、シュッツの作品における「言葉と音楽」という視点で発表をしました。フィグーレン・レーレなどにも触れてみました。後日、学部時代にお世話になった、國安洋先生にお会いしましたら、「戸口先生が、君の発表を褒めていました」と、おっしゃっていました。この研究の過程で、シュッツ協会に入会したと記憶しております。

その後、ドイツへの留学を考えた時期がありました。ドイツ語修行で、青山のゲーテ・インスティトゥートに通いました。同じクラスに、シュッツ合唱団員の石井賢さんや、サイトウキネン、リンツ・ブルックナー管弦楽団、都響で活躍されることになる、ヴィオラ奏者の鈴木さんがいらっしゃいました。鈴木さんとは、ショスタコーヴィチの交響曲という話題で、石井さんとは、シュッツの楽譜という話題でお話した記憶があります。しかし、諸般の事情で、留学は断念しました。

ドレーズデンには、何度も行きました。ベルリンの壁がくずれる直前の夏、1989年8月、DDR時代に行ったのが最初です。ドレーズデンを訪れたのは、ちょうど汎ヨーロッパ・ピクニック計画の頃でした。フラウエン教会などの瓦礫の山を目にして、大きなショックを受けました。また、シュッツの小さな石碑なども見つけました。(石碑の場所は、ツヴィンガー宮殿の脇にある、お堀脇の緑地の中です)

1990年代後半から、オペラに興味を持つようになりました。2001年、2002年、2003年のヨーロッパでのオペラ鑑賞に関しては、『オペラ放浪記』『オペラ放浪記2』(知玄舎)を著しました(最近、電子版[キンドル版]『オペラ放浪記1-6』を改訂[もう少しすると、アップロードされる予定です]し、2004年、2005年、2006年のヨーロッパ・オペラ旅行の記録を追加しました)。もし、シュッツの「ダフネ」の楽譜が残っていれば、西洋音楽史、オペラ史の数ページが書きかえられることになるだろう、と思っています。

私と音楽とのかかわりが大きく変わったのは、2011年3.11です。この大震災の後、しばらく音楽を聴きたいとは思いませんでした。少し時間が経って、いくつかの宗教曲なども聴いてみましたが、私の体が受け付けませんでした。シュッツの「死せる者は、幸いである」も聴きましたが、音楽は素晴らしいのに、歌詞を受け入れることができませんでした。色々試行錯誤の末、やっと私の体・耳が受け入れることができる音楽を見つけました。バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ、無伴奏チェロ組曲です。1年半ほど、この2つの曲集を狂ったように聴きまくりました。購入したCDは、200セットを超えたと思います。2012年の末頃から、徐々にバッハの他の曲も聴くようになりました。主に、カンタータを聴

くようになりました。カンタータ全集のCDは、6セット(入手可能なものすべて) 購入し、直ぐにすべて聴き通しました。2年くらい前から、バッハ以外の音楽も少しずつ受け入れるようになりました。ただし、シュッツの音楽の「素晴らしさ」は十二分に理解していますが、現在の自分を見ていると、シュッツの音楽に見合った生き方をしているとは思えません。自分ながら、恥ずかしい限りです。

最後に、私の体験談をご紹介します。

拙著『オペラ放浪記』に書いたことです。2001年の3月に、ドレーズデンの聖十字架教会で、クロイツコーアによる、バッハ「ヨハネ受難曲」を聴きました。演奏の前後に拍手はまったくありませんでした。宗教曲を聴くときに、拍手のないことが、こんなに素晴らしいと思ったことはありませんでした。おそらく、地元の人にとって、これは単なる音楽の演奏なのではなくて、一年の宗教的な行事のようなものなのでしょう(詳しくは拙著で)。日本でも、教会など「聖」なる場所で宗教曲を演奏する場合には、「拍手をしない」というルールを作ってみてはどうでしょう。会場の入口に張り紙をし、プログラムに大きく書く、チケットにも書く、などをすれば効果はあるように思います。日本でも、一度だけこんなことがありました。三百人劇場で、ギリシャ悲劇「オイディプス王」が上演された時です。客席に入る複数のドアの脇に、「劇の性格上、終演のとき、拍手はお控えください」という張り紙がありました。終演後、まったく拍手はありませんでした。「拍手をしない」素晴らしさを、もっと多くの人がわかってくれたら、と願っています。(終)

榎田さん、原田さんは未知であったシュッツの音楽を、既知のものとされた時、「深い精神性」「何かしら引き込まれそうな怪しい? 響き」「素朴な力強さ」等と感想を述べておられます。同じような気持ちをお持ちの方は多いのではないのでしょうか。シュッツは様々なジャンルの音楽を書いているのですが、特に「宗教と音楽」との関わりで捉えられることが多いかと思います。

ただヨーロッパでシュッツの信仰であるルター派プロテスタントは、主としてドイツの東北地方に広まった宗派であり、イタリアやフランスでは、シュッツはもとより、バッハの音楽もあまり演奏されないのが実情です。また「国際」の名を冠する当協会は、日本のように国民の大部分が神仏と共に生きている人達を、どのように受け留めているのでしょうか。シュッツの音楽を愛する前提として、キリスト教の信仰者でなければならないのでしょうか。このことは協会に突き付けられた難しい問題です。普通大好きな音楽家について述べる時、その音楽家と信仰を一致させる必要は問われません。シュッツと縁りの強い地を選んで、毎年大会を開催する時にも、行事を行う場所は注意深く選択されています。しかしシュッツはカトリックの国、イタリアに留学していますし、彼の音楽はやはりカトリックの国、ポーランドにも伝播しています。そのような国々で大会が開催された時のことですが、ヴェネツィアでは聖マルコ大聖堂でのコンサート、ドイツ人のためのルター派プロテスタント教会での礼拝等がもたれました。ブレスラウでもドイツ人牧師が巡回して来るルター派のプロテスタント教会での礼拝、エキュメニカルな立場を取る教会でのコンサート等が行われました。なお本年の開催地チューリヒは、同じ宗教改革者ながら、ルターとは考えを異にするツヴィングリと関わる地です。

日本支部の事務局ニュース第12号(2013年7月16日)で、1965年のベルリン大会における

会長ウェッテルレ氏の御挨拶を御紹介いたしました。この年は日本に支部ができ、協会が本当に「国際」的になったことを受けて、会長は「国境を越えて」という演題でお話されたのです。その真の意味に関して、正木前支部長よりお教えいただきました。「キリスト教の宗派を越え、あるいは特定の宗教に縛られない」シュッツの音楽受容を、是認する御言葉であったのではないかとのことでした。

とはいえ、教会音楽、宗教音楽があまりにも普通にコンサート・ホールで演奏され、深く考えもせずに、演奏技術の良し悪しに関するコメントに終始する現代の風潮は、どのように受け止めるべきでしょうか。宗教音楽の世俗化、またそれにより生き残っていく宗教作品に関し研究され、今春に博士号を取得された会員 瀬尾文子さんの論文の要旨を御紹介させていただきます。なお瀬尾さんはシュッツ合唱団、東京のメンバーとして歌っておられた時期があります。本号の淡野弓子さんの「軌跡」中に、瀬尾さんがレーヴェの《贖罪のいけにえ・新しい契約》を淡野さんに御紹介なさり、その曲を合唱団が歌うことになったという件(くだり)があります。偶然ながら、ビックリいたしました。(荒川)

近代市民社会と宗教音楽

——《エリヤ》に至るオラトリオの世俗化の論理——

会員 瀬尾 文子

こんにち我々はバッハの受難曲やカンタータを、大した違和感なくコンサート・ホールで聴く。従来は教会の中で、時には典礼の一部として演奏されていた音楽が世俗的な環境で聴かれるようになる現象——我々はそれを教会音楽の世俗化と呼ぶ——は、19世紀に入って急速に進んだ。しかし、聖俗二分法的思考の根強いキリスト教社会において、それはいったいどのような論理で正当化されたのか。これは近代の合理精神は伝統的な宗教的価値をいかに受けとめたのかという、より大きな問いと関連する。本論はこの問題を19世紀前半ドイツ語圏のオラトリオ・ブームに即して考察する。このブームにまつわる宗教性についてはこれまでも、この時代一般の教養志向や宗教趣味といった傾向が指摘されてきたが、教會的なものの世俗化を許容する、否むしろ推進する、その具体的な動的原理は充分には解明されてこなかった。本論が導き出した結論は、オラトリオは教會的でない宗教性を拠り所にした、高度に知的な芸術的エンターテインメントとして教會外で振興されたというものである。

オラトリオの流行は、ナショナリズムと教養主義を背景に起こった。その際、それまで宗教的内容を持つ管弦楽付きの大規模な声楽曲という緩やかな共通認識しかなかったこのジャンルについて、改めてその本質を見極めようとする議論が活発になされた。本論第1章は、直前の時代には教会音楽の範疇にあったオラトリオがそこから解放される様子を言説上に確認する。注目すべきは「教会と歌劇場の中間ジャンル」という新しい位置付けである。複数の論者はこのジャンルの起源に立ち返ることで、オラトリオと教会の必然的な結びつきを否定した。だが、

オペラは通俗的娯楽の代表である。劇場風なものに罪悪を見る感性が残る当時、オラトリオがそれに近づく危険にはいかなる説明が与えられたのか。

オラトリオは次の二点でオペラのような娯楽には成り下がらないとされた。第一は視覚的演出の欠如である。聴衆はそれを想像力で補わねばならないゆえ、オラトリオは精神的に高等な芸術とされた。そこには「オペラの国イタリア」に対する「オラトリオの国ドイツ」の精神的優位というイデオロギーが働いている。第二は、リブレット(台本)の宗教的内容と教会様式という音楽的要素である。それはオラトリオに実践的に取り組む市民の修養にふさわしいものとされた。

第2章はオラトリオ論の内実の分析である。当時の議論の最大の論点はリブレットの詩の形式(エピック、リリック、ドラマチック)だった。オペラへの接近とは、具体的にはリブレットのドラマチック化を指す。第1節は年代順にリリック派、中立派、ドラマチック派の代表的な見解をとりあげ、その流れを追う。

リリックは、詩と音楽によって普遍化された感情世界への没入を本質とする。ミヒャエリスはズルツァー『一般芸術理論』を補強しつつ、この形式を推奨した(1805年)。リリックな詩に多い普遍的な主体への「正体不明」という批判に対し、彼はそれは教会音楽を聴く上で高揚されるべき共同体的な宗教感情の主体だと反論する。

だが多感主義時代が去ると、リリックへの批判的な見解が目立ってくる。フィンクは、オラトリオのように大規模な作品で単一の感情を高めていくのは困難であるとして、「擬似ドラマチック」を提唱した(1827, 28, 37年)。それはまるで紙芝居を見るかのごとく、筋を想像力によって補いながら、場面毎に変化する多様な感情を味わうリブレットである。

その後優勢になるドラマチック派は、鮮明な具象化と生き生きとした筋展開を重視した。ここでは聴衆は登場人物に自己移入し、数々の事件を追体験する。現実同様に未知なる先行きに、聴衆の関心は強く掻き立てられる。芸術を「隠れたものの啓示者」と呼ぶケーファーシュタインはその魅力を重視し、「退屈な」オラトリオを非難した(1843年)。

エピック派はごく少数だった。依然として定番の題材だった聖書は、もはや客観的な語りによっては当時の聴衆にリアリティをもたらさないからだった。オラトリオの持つ重大な内容は、それゆえリリックによって普遍化するか、聴衆の心を捉えるドラマチックな方法で表現されるべきと主張されたのである。

時代の先端を行くドラマチックだが、実践の場では重大な問題が生じた。聖なる存在の具象化の問題である。第2章第2節は、実際にこの問題が表面化した二作品をとりあげ、その内実を跡付ける。共に一人の男性歌手がキリストを演じる受難オラトリオである。ベートーヴェンの《オリーヴ山のキリスト》は、キリストの人間性を前面に出すリブレットが問題視された。それは三通りに表れる。第一は、出版社から作曲家へのリブレット変更の要請として、第二は英国では上演に際して常にリブレットが書き換えられた事実として、そして、ドイツのジャーナリズム上での批判としてである。シュポーアの《救世主の最期のとき》は、制作過程でリブレット作者と作曲家の間に激しい対立が起こった。いずれの場合も、オラトリオの宗教性を直に信仰の問題として捉える立場と、ドラマの虚構の力を重んじる芸術家としての立場が対立の

要因だった。

第2章第3節は、多くの論者が主張した主題の「重大さ」と、18世紀後半に美的範疇として確立した「崇高」の関連に注目する。「崇高」は宗教的であるが教会的ではない概念である。それは前世紀からヘンデルのオラトリオや《天地創造》をめぐって語られてきたが、1820年代の「最後の審判」を主題とする一連のオラトリオも、この概念の具現化の試みだった。本論はそれをシュナイダー/アーペルの《世界審判》、シュポーア/ロホリッツの《四終》で検証する。詩人アーペルとロホリッツは共に「崇高」に関する小論を書いていた。亡霊の美的表象としてそれを論じたアーペルは、自らの理想とするサタン像を《世界審判》にとりいれた。一方、ロホリッツは教会様式の音楽と歴史的発展を遂げた管弦楽にそれを見る。そしてやはり彼が崇高とみなす黙示録の聖句のみによってリブレットを構成し、作曲家に音楽上のアドヴァイスを行った。実際の演奏評を見る限り、アーペルの意図は聴衆に伝わらなかったが、ロホリッツの意図は概ね伝わった。

第3章は、実際のオラトリオ演奏の「場」に焦点を当て、その宗教性を論じる。具体的な考察対象は、ドイツでは英国の例を模範に1810年に始まった音楽祭である。それは一般市民の組織によって運営され、当初は「民族の祭典」的な性格を持っていたが、30、40年代に「プロフェッショナル化と商業化」への傾向が見られるようになった。その変化の中で、オラトリオ流行の背景にあった教養主義的な宗教性への関心はどうなったのか。

ここでは事例としてニーダーライン音楽祭をとり上げる。それは聖霊降臨祭に開催され、初日のオラトリオ演奏を慣例としていたが、教会暦に無配慮な演目や会場の性質に明らかのように、宗教的な雰囲気は希薄だった。1834年の聖職者グループの国王への直訴事件は、この催しが教会と対立的に捉えられていた事実を示す。そしておそらく教会への対抗意識から、音楽祭の主催者はその芸術的水準を高めることに腐心した。音楽祭実行委員会は非公式の定款で自らの目的を「完全なる創造物の普及」と言い表した。それは宗教に近い価値を芸術に認める表現である。

この音楽祭の最大の功労者メンデルスゾーンも、その芸術性の向上に尽力した。なかでも過去の巨匠の作品を可能な限りオリジナルな形で演奏しようとしたのは、作曲者の意図を正確に伝えようとする芸術家らしい使命感の表れであると同時に、聴衆が安易なヴィルトゥオーソ崇拜に陥らないための啓蒙的配慮であった。メンデルスゾーンがこの音楽祭のために使徒ペトロを主題とするオラトリオの制作を練った事実は、彼が聖霊降臨祭の教義的意味を確かに認識していたことを示すが、彼の関心はその教会的な宗教性ではなく、それが高度に芸術的な象徴表現を生み出す可能性にあった。

第4章は、作曲家メンデルスゾーンの《エリヤ》(1846)の制作理念に迫る。《パウロ》(1836)からの作風の変化(エピック・リリックからドラマチックへ)は先行研究でも指摘されてきたが、本論はそれを当時のオラトリオ論と関連させ、《エリヤ》のドラマ性の特徴を踏まえて作品の根本主題を読み解いた点が新しい。

リブレット協力者への書簡で目を引くのは、作曲者が対立するものの直接的な対峙によって生まれる迫力をドラマの整合性に優先させたこと、そして通常はドラマチックと相反すると捉

えられる省察的要素(リリックな詩)を求めたことである。それは当時のオラトリオ論や前作《パウロ》への批判から、彼が作品全体を貫く根本主題の必要性を認識したことに因っている。筆者の考えでは、メンデルスゾーンはそこで「見えざる神の接近」という、極めて重い宗教的主題を設定したのである。神は存在するのか、しないのか。それは緊迫する場面を生み出す要因になると同時に、劇音楽が単なる「音画」になるのを防ぐ内容の重大性を保証する。預言者エリヤの物語は、手に汗握る最高のエンターテインメントとして、聴衆にリアリティを持って迫ってくる。この主題はまた、聖なるものの具象化の問題を回避した。さらには、謎解きの面白さを聴衆に提供する象徴表現の素材ともなり得たのである。

もはや奇蹟など信じない近代の教養市民にとってオラトリオが内包する宗教的内実は、このジャンルの通俗的な娯楽性を否定する根拠となり得る一方で、その享受にはドラマの虚構の力を必要とするというアンビヴァレントなものだった。高度に知的なエンターテインメントという論理はその矛盾を解消しつつ、オラトリオを教会外で推進する原動力になったのである。(終)

ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 40 年の軌跡 (19)

会員 淡野弓子

先回は 2001 年 10 月 1 日に行なわれたシュッツ全作品連続演奏の最終回のご報告で終了しましたが、今回は 2001 年の催しで書き残したいくつかをお伝えし、続けて 2002 年 3 月までの記録に進みたいと存じます。

2001 年 5 月 25 日(金)、ICU 宗教音楽センター主催の公開講演会で、「音となったイエス」— ハインリヒ・シュッツの音楽 — というタイトルのもと、私はシュッツについてお話をする機会をいただきました。この日は 5 月 9 日(水)のシュッツ全作品連続演奏 [その 28] と 6 月 6 日(水)の同 [その 29] の間でしたので、私のシュッツに対する気持ちも最高潮であった時期でした。2001 年 10 月発行の『ICU 宗教音楽センター会報』には、当日語ったことが、私の顔写真から漫画の吹き出しのように掲載されておりました。その要約の見事さと編集の妙に感謝を込めて、そこから幾つかをここに再録させていただきます。

- ★ 今年で、シュッツの全作品 500 曲の演奏が終了します。全曲演奏をしている間、失望したことがなかったということに、大変感謝しています。それはシュッツの作品が、大きな宇宙的な力やキリストがこの世で言われたことを具現しているからだと思います。
- ★ ラテン語からドイツ語へ シュッツはヴェネツィアで G. ガブリエリから作曲を学びました。当時はラテン語の音楽が優勢でしたが、シュッツはラテン語とドイツ語では音楽の進み方が違うという事に気づき、ドイツ語で音楽を作りました。このことで、教会旋法だけで進んできた音楽が和声的な音楽へと変化していきました。
- ★ Schütz を歌うと元気になる！

1. 歌詞がいい。2. 和音の転換が早い。3. 和音の中にある宇宙的な法則と一致する喜び。

10月9日(火)綱町三井倶楽部において〈シュッツ全作品連続演奏終了・感謝祝会〉が開かれました。シュッツ合唱団発足当時からずっと演奏会をお聴きくださっている方々およそ40名、瀬戸瑠子さんをはじめ共演の器楽奏者に合唱団員およそ40名を加えての集まりとなりました。

スピーチをくださった音楽評論家の飯野尹氏からは「普通音楽を聴く時は演奏家と自分とが見合っけしめい緊張してしまうのだが、シュッツの演奏会は音楽に包み込かれるようで心地よい」とのお言葉、私たちもホッといたしました。

シュッツ協会日本支部の会員で皆様よくご存知の野本 元氏は、シュッツと尾崎喜八、そしてシュッツ合唱団と尾崎喜八との関わりをお話くださいました。尾崎喜八のエッセイによれば「その作にあつて独特な高邁と優雅さ。各声部の輝くばかりな交錯と接触、私はこうしたシュッツを今から七、八年前に、その『ドイツ鎮魂ミサ曲』で初めて自分に知らしめた謹厳有能な若き化学者、心に宗教的な音楽を抱きながら毎日研究室で働いている友人野本 元に感謝せずにはいられない。」(『音楽への愛と感謝』1973年8月30日発行・新潮社)とありますが、私たちも、活動の始まったときからお聴きくださり、その都度ご丁寧な感想をお寄せくださる野本氏に感謝の気持ちで一杯です。野本夫人悦子さんはこの日、尾崎喜八の詩『ハインリヒ・シュッツ』を朗読してくださいました。その暖かいお声は今でも耳に残っています。

元NHKディレクター大塚修造氏は「シュッツの曲を好きになつたのは《クリスマスの物語》の終曲で singen, singen という箇所を聴いて以来のこと、指揮者の若杉さんもそして淡野さんもそうだ、というので驚いた」と。正にここは、ドイツ語の意味と発音の身振りの一致という点で白眉と言ってよい箇所であり、さらに実際に声に出して歌ってみると瞬く間に元気になるのです。

当時三井物産社長を務めておられた、今は亡き清水慎次郎氏からも暖かいお言葉をいただきました。清水氏はご自身も合唱を楽しまれ、しんから音楽を愛しておられた方でした。リオ・デ・ジャネイロで「ハインリヒ・シュッツ・ド・リオ」でソプラノを歌っておられた清水夫人茂美さんも、私がリオでオーケストラの指揮の勉強をしていたこと、子供たちのベビーシッターであったブラジル人の若い女の子を日本に連れてきたことなどを話してくださいました。すべて今となつては感無量であると同時に、演奏も人生も意味の無い瞬間は存在しないということに気付かされております。

最後にシュッツ合唱団の、現在は在籍50年になろうという阪本一郎さんが「シュッツとは真実しか受け付けてくれない恐ろしい作曲家、指揮者もこわい。本当の声が出るまで容赦せず待っている。」とのスピーチに私は「歌い手も忍耐強い。『もうお止めになつては』と言つても次の練習にはまた出ていらっしやる。」と答えたのでした。

こののち、新聞紙上、音楽誌に全曲演奏達成を真正面から受け止めた真摯かつ好意的な記事が掲載され、嬉しく思うと同時に、未来へ向けてさらに厳しく、美しくありたいと願つた次第です。

11月半ばから12月初旬にかけて、我らが愛する、今は亡きアグネス・ギーベル先生が来日

され、講座やコンサートで実に内容の豊かな、また確かなものを私たちに残してくださいました。この連載の[9](1990年)、[12](1995年)にも、「高声は低声からの倍音で」という原則についての記述がありますが、今回もこの原則に終始されました。ギーベル先生は、譜面に書かれたどのような高音でも歌えなかった音は無かった、という程の自然の声に恵まれた天然歌手の一人でした。戦後間もなくバッハ歌手として見出され、あっという間にディーヴァとしての名を欲しいままにされました。が、60歳を越えたころ、指揮者でマネージャーであったご主人を心臓発作で亡くされ、同時にアグネス・ギーベルの声も失われたのです。「以来、全く歌えなくなった。毎晩、このまま死んでしまおうか、と思った。がある夜、寝台の上で呻くように低い声を出し、何の気なしにその声を2オクターヴ上げた。なんと声が出た。低音を半音ずつ上げ、そのたびに2オクターヴ上も歌ってみた。声はどんどん伸びていった。友人の物理学者にこのことを話すと彼は『それは音の原則。当たり前のこと。』と言った。彼はそれから毎日夕方になると家にやってきてはこのオクターヴを行き来する練習をしてくれた。1年後、私はまたコンサートで歌うようになった。」

この貴重な体験をギーベル先生は日大でも藝大でもそれは真剣に語られ、低音の重要性を説かれたのでした。

11月20日(火)午後2時20分～4時 日本大学江古田校舎

日大芸術学部音楽学科大学院生のために

ベートーヴェン「君を愛す」「喜んだり悲しんだり」シューベルト「春の神」「憂愁」

ピアノ 廣田明子 通訳 淡野弓子

11月25日(日)午後1時～3時 東京藝術大学

日本声楽発声学会

私はこの2オクターヴ下から声を出す練習を重ね、その後の2010年4月、アメリカでエリザベス・マンヨン先生の教えを乞い、マンヨン先生も上の声が不十分であった時には必ずオクターヴ下から取り直すというレッスンに驚いたのです。マンヨン先生は1822年イタリアに生まれたバリトン歌手エンリコ・デッレ・セディエ(Enrico delle-Sedie 1822-1907)の発案になる「声の明度のチャート」を用いて、「倍音の法則」に基くレッスンを授けてくださいました。

さらに、2010年6月、マンヨン先生に「倍音の法則」と「人間の声」の関係についてお訊ねすると先生は、倍音のことならヘルムホルツと言われ、私はすぐにヘルムホルツ(Hermann von Helmholtz 1821-1894)著『Die Lehre Von Den Tonempfindungen Als Physiologische Grundlage Für Die Theorie Der Musik』を入手、特に〈Klänge der Vocale 母音の響〉の項を熟読しました。ここには倍音や振動数の比率といった音楽の物理的な理論、法則と、耳や声帯、口腔といった人間の生理学がどう関わるかということが述べられていました。声の振動数と口腔内の型には密接な関係がある、すなわちあるピッチに対して、倍音の生まれ易い母音があることが根気の良い実験を通して明らかにされたのです。

セディエはこの発表を知ると、自分の現場での経験をもとに、中央ドから1オクターヴ上のソまで12の音に対し、それぞれどんな母音が適正かを示すチャートとしました。私はこのチャートの教えるところをシュッツ合唱団に伝え、メンバーの一人ひとりが旋律を形造る各音を根音から第何倍音であるかを認識し、さらにチャートの示す明度を歌うべき言葉の母音に融合させることによって、そこに響く一つひとつの和音がその在るべき響きで鳴り渡るまで練習を重ねました。シュッツのように和音の転換の速い音楽には、この技術が欠かせません。ギーベル先生の教えを発端とし、マンヨン先生を通してセディエを知り、シュッツ合唱団が今の響きに成長するまでに27、8年が経過しました。この法則と技法は習得に時間と忍耐を要しますが、ソロはもとより、合唱する者にとっては演奏の根幹を支える技術となりました。

11月27日(火)午後7時、ルーテル市ヶ谷センターにおいて、2年前の1999年11月22日に亡くなられたチェンバリスト鍋島元子さんを偲んで〈アグネス・ギーベル/ 淡野弓子 歌曲の夕べ〉が催されました。高村光太郎 詩・別宮貞雄作曲《智恵子抄》を淡野が歌い、シャミッソー 詩・シューマン作曲《女の愛と生涯》をギーベル先生が演奏してくださいました。ピアノは鍋島元子さんのお弟子であった武久源造さんでした。批評家丘山万里子さんはこの二作品の背景や人々の絡み合った心を鋭くえぐり、読み応えのあるプログラム・ノートをお寄せくださいました。この日は別宮先生もお聴きくださり、「あなたの演奏はとても強い。こんなに強い《智恵子抄》は初めてだ。」とのご感想をいただいたものの、ギーベル先生の、1人の女性の愛と生涯がエーテルと化したような声と歌唱は、私にとってただただ遠い世界であったことをはっきりと覚えています。また最後まで毅然と仕事を続けられた鍋島元子さんの存在の重みを改めて感じ、この稀有な2人の芸術家とともに音楽を奏でた幸せを憶う昨今です。

12月2日(日)、ギーベル先生は《メサイア》のソプラノ・ソロとして登場されます。

横浜いずみ教会創立20周年を記念して

ヘンデル《メサイア》全曲演奏 12月2日(日)18:00開演 神奈川県立音楽堂

Sop. アグネス・ギーベル A. 永島陽子 T. 淡野太郎 B. 故・宮原昭吾

古楽シンフォニア・ムシカ・ポエティカ

Concert M. 瀬戸瑠子 Trp. 島田俊雄 Timp. 松倉利之 Vne. 桜井茂

Cem. 岡田龍之介 Org. p 菅哲也

プレイズィング・クワイア [合唱指揮 石塚瑠美子] ハインリヒ・シュッツ合唱団 東京

Cond. 淡野弓子

ギーベル先生の歌われる音符、そこには先生の人生の全てが込められており、聴き手の心の一つにする不思議な音色です。それは透明であり複雑な音彩でした。またこの日は日本ホーリネス教団の横浜いずみ教会の会員の皆様が10年前に志を持たれ、同教会員でありシュッツ合唱団のアルト歌手でもある石塚瑠美子さんの指導のもとに努力を重ね、満場の聴衆を前に教会からの《メサイア》発信が成功に導かれたという恵みに満ちた出来事でもありました。石塚さんは1969年以来のシュッツ合唱団員で、今なお現役で活躍中です。ギーベル先生は満80歳、

当時は夢にも思いませんでした、結果的には日本最後の演奏となりました。

明けて2002年の受難節にはシュッツ合唱団のソプラノで、当時は東京大学大学院の博士課程で美学の研究に携わっていた瀬尾文子さんからその存在を知らされたレーヴェの《贖罪のいけにえ・新しい契約》という珍しい作品を演奏しました。彼女が修士論文として提出した〈19世紀前半ドイツにおける〈受難〉オラトリオ中のコラールの意味〉では、このレーヴェの作品について、またこの作品中のコラールの意味について綿密な考察がなされています。瀬尾さんは2000年秋にこの曲をベルンブルクで聴き、会場に展示されていた初版スコアのコピーを手に入れました。私はその楽譜を見せて貰い、ぜひ演奏してみたいと思ったのです。

合唱譜とスコアがCarusから出版されており、すぐに注文、届いたスコアの大編成のオーケストラに仰天、よくよく考えた末、初版のシンプルな弦楽五重奏とともに演奏する道を選びました。

〈受難楽の夕べ〉3月26日(火) 19:00 開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂

カール・レーヴェ 《贖罪のいけにえ・新しい契約》日本初演

Carl Loewe(1796-1869) Das Sühnopfer des neuen Bundes 1847

指揮 淡野弓子

独唱 徳永ふさ子[S] 永島陽子[A] 大島博[T] 小原浄二[B]

重唱 柴田圭子[S] 依田卓[A] 星野正人[T] 谷口正[B] 石井賢[B]

弦楽五重奏 瀬戸瑤子[VnI] 渡邊慶子[VnII] 百武由紀[Va]

諸岡範澄[Vc] 西澤誠治[Kb]

合唱 ハイブリッド・シュッツ合唱団 東京

主催 ムシカ・ポエティカ 協賛 レーヴェ全歌曲連続演奏会(代表 佐藤征一郎)

後援 東京ドイツ文化センター マネジメント 菊田音楽事務所

この受難物語で面白かったのは最初の部分です。ラザロの墓の前に集まった4人の者がロタに自分の身に起こった奇跡を語り合う場面から始まるのです。レーヴェの同時代人でルターのコラール復興にも熱心だったという詩人テルショウ Wilhelm Telschow (1809-1872) の台本は、冒頭で「死者の復活」が暗示され、イエスの受難、十字架上の死を経て、終結合唱では「蔭かれる時は朽ちるものでも、朽ちないものに復活する。」(第一コリント 15:12) というパウロの宣言が力強く歌われ幕を閉じます。

レーヴェは当時「北ドイツのシューベルト」と呼ばれ、バラードの作曲家であり、また優れた歌手として非常に人気のあった人でした。当日のプログラムに寄せてくださった瀬尾文子さんの、レーヴェの音楽の魅力はなんといってもその旋律にある、と始まる解説には、レーヴェ自身も、音楽芸術の真髄を「美しいメロディ」としていた、とありました。さらにここではレーヴェの音楽観が紹介されています。例えば「和音(die Harmonie)が神の律法(das Gesetz)を意味するのに対し、美しいメロディは福音(das Evangelium)を告げるものだと語った。」と非常に宗教的で、これはルターが語っているのではと思わせるものでした。

声楽のソリストには役柄が決められておらず、福音史家の朗唱もアリアも、そこにいた人が伝えるといった趣きでした。劇中に置かれた8曲のコラールは、その強さ、深さ、民衆性が、曲全体を覆う市民性の柱となって、教養、品格といったものに留まらない奥行きを感じさせるオラトリオでした。この作品の再演は今に至るまで果たされていませんが、近い将来、是非皆様にお聴きいただきたいと願っています。

以下は梅津比古氏による演奏会批評（2002・4・17付 毎日新聞・夕刊）です。

音のかなたへ

埋もれた受難曲

歴史の取り合わせによって、不幸な評価を刻印される人がいる。歌曲を多く作曲したドイツのカール・レーヴェ(1796~1869)もその一人だ。彼の場合、2カ月後にシューベルトが生まれたことと、文豪ゲーテの存在が絡んでくる。

シューベルトはゲーテを心底から尊敬し、歌曲史上不滅の「魔王」をはじめ彼の詩に74曲も作曲し、彼のもとに送った。だがゲーテは返事を書かず会いもしなかった。レーヴェも「魔王」に作曲したが、ゲーテはレーヴェには会い、評価を与えている。シューベルトは一部の友人には認められながらも、極貧のうちに死んだ。片やレーヴェは作曲家として人気を博し、教会音楽家の定職にも就いた。

こうした対照的な人生から、後世、レーヴェに対して、ややもすると、世間的に成功した凡才との印象が持たれ、彼を高く評価した当時の音楽的レベルを見下す傾向さえ生じた。現在、レーヴェが演奏会やCDで取り上げられることは極めて少ない。

このほど淡野弓子指揮のハインリヒ・シュッツ合唱団によって、東京カテドラル聖マリア大聖堂で日本初演されたレーヴェの受難オラトリオ「贖罪のいけにえ・新しい契約」は、そうした先入観を根底から覆してくれた。

弦楽による序奏と、民衆やラザロの友人たちが、イエスを探す四重唱から曲は始まる。沈み込むような旋律が、静かな美しさを保つ。激しい劇性は内に秘められ、これみよがしのところはなく、凜とした品格を失わない。題は「イエスの贖罪によって神と人との契約が完成する」との意味で、内容はバッハの「マタイ受難曲」などと同じく、聖書の受難のくだりをもとにコラールを挿入したものである。その冒頭が民衆の視線によって始められることは、この曲の性格を決定づけている。受難曲としての口上から入るのが通例であった導入部を、バッハは十字架を背負って刑場に引かれゆくイエスの劇的な行進から開始した。だがレーヴェは、名も無い人々の、か細い声から始めたのである。

ここにはバッハにおける宇宙的な深淵は無い。だが、普通の人の悲しみや苦しみ、喜びを大切に、せつないほどの優しさがある。

当夜の演奏も、この受難曲を愛する思い入れが、自然な美しい調和を生んでいた。バッハやシューベルトほどの天才でなくとも、真摯に努力すれば、いかに本質に到達できるか、この曲は教えてくれる。演奏に関しても同じことが言えるだろう。

目立つことのみを求めがちな現代は、普通のなかから生まれいずるものの価値を、見失っているのかもしれない。

梅津時比古（専門編集委員）

このあとシュッツ合唱団はドイツ演奏旅行に出かけました。今回はこの旅行のご報告から始めたいと思います。(続く)

会員の活動状況

お申し出いただいたもの、編集委員がネット等を通して見つけた情報等で、2018年後半の活動の内、特にシュッツの周辺、バロック音楽等に関わるものを中心にお知らせしています。イベント、コンサート、講演、出版等の御紹介です。なお出版物に関して入手可能なものは、既刊もの、予定のもの等を含め、比較的最近のものを御紹介しております。イベントやコンサートに関しては、年2回のNewsletter 発行と日程が合わず、お知らせが間に合わないものもありますが、御理解のほどお願いいたします。(会員名あいうえお順)

- 1) 荒川恒子 (お問い合わせ eterna@nifty.com)
 - ・2018年7月末 「さようなら、そしてありがとう『アントレ』ISSN 0913-7386」『アントレ』300号
 - ・2018年11月25日(日) 15:30 - 17:00 於: 山梨県立図書館多目的ホール
ムジカ エテルナ 甲府 第93回定期演奏会 (企画・構成・演奏)
- 2) 石井 賢 (お問い合わせ ishiim@tkg.att.ne.jp)
 - ・輸入CDへの日本語解説執筆 「D. ブクステフーデ: オルガン作品全集」(Membran CLA — 233818) (Org. ウルリク・シュッパング=ハンセン)
 - ・2018年10月26日於: アクロス福岡シンフォニーホール「新・福岡古楽音楽祭 第5回記念公演モンテヴェルディ《オルフェオ》出演
- 3) 今井奈緒子(東北学院大学教養学部教授/ 宗教音楽研究所長 www.tohoku-gakuinn.ac.jp/)
 - ・第23回オルガン演奏法講師 5月10日-11月9日
 - ・第13回学生のためのオルガン演奏法講師 5月-12月
- 4) 木村佐千子(お問い合わせ skimura@dokkyo.ac.jp)
 - ・2018年3月 論文「ルターと音楽」『獨協大学 ドイツ学研究』74: 21-55.
- 5) 佐藤康太(お問い合わせ kobo9981@p01.itscom.net.)
 - ・Kota Sato. 2017. “Neu gedichtete Kirchenlieder im späten Schaffen Telemanns”. In *Mitteilungsblatt der internationalen Telemann-Gesellschaft e V.* 31: 42-51.
 - ・Kota Sato, Mai Kosikakezawa and Hansjörg Drauschke eds. 2018. *Reinhard Keiser, Almira, Kritische Ausgabe*. Beeskow: Ortus -Musikverlag (Musik zwischen Elbe und Oder vol. 16)
- 6) 高橋美紗 (お問い合わせ missa.tak@yahoo.co.jp)

- ・Bachs Italienisches Konzert und seine Konzerttranskriptionen nach italienischen Vorbildern: Stilistische und analytische Studien. (ライプツィヒ大学に提出した修士論文。現在審査中)

7) 淡野弓子(お問い合わせ yumiko@musicapoetica.jp, Tel 03-3970-0585, Fax 03-3998-5238)

- ・ムシカ・ポエティカ 2018 Special Summer Concert
〈デュオ・うめもも リサイタル 夜と夢〉(淡野桃子(Sop.) + 梅谷 初(Pf.))
7月27日(金) 19:00 於: 大泉学園ゆめりあホール
全席自由 3,500円(一般) 3,000円(学生)
 - ・ハインリヒ・シュッツ合唱団 創立50周年記念コンサート その3
〈シュッツ音楽の華〉(厳選16曲)
9月21日(金) 19:00 東京カテドラル聖マリア大聖堂
淡野弓子/ 淡野太郎指揮 ハインリヒ・シュッツ合唱団 東京
ムシカ・ポエティカ古楽アンサンブル
全席自由 4,000円(一般) 2,500円(学生)
 - ・ハインリヒ・シュッツ合唱団 創立50周年記念コンサート その4
〈レクイエムの集い〉シュッツ: 音楽による葬送 フォーレ: レクイエム
11月9日(金) 19:00 武蔵野市民文化会館小ホール
淡野弓子/ 淡野太郎指揮 ハインリヒ・シュッツ合唱団 東京/ メンデルスゾーン・コア
全席自由 4,000円(一般) 2,500円(学生)
 - ・メンデルスゾーン基金日本支部創立10周年記念コンサート
8月24日(金) 18:30 於: 浜離宮朝日ホール
序曲 美しいメルジーネの物語 2台のピアノのためのコンチェルト
詩篇 114 イスラエルはエジプトを去り
謙・デイヴィッド・マズーア指揮 MFJ10周年記念オーケストラ 福間光太郎
メリнда・リー・マズーア Pf. 女声アンサンブル八重桜特別編成混声合唱団/
メンデルスゾーン・コア/ ハインリヒ・シュッツ合唱団 東京
お問い合わせ: メンデルスゾーン基金日本支部 info.mendelssohn@gmail.com
Tel 03-3589-3705
全席自由 7,000円 基金会員 6,000円 学生 2,500円
 - ・朝日カルチャーセンター立川 8月25日(土)、9月15日 13:00-14:30
於: 立川教室 (Tel 042-527-0411) 申込み: 朝日カルチャーセンター立川教室
バッハ《マタイ受難曲》の意味を探る一曲に埋め込まれた隠喩、象徴を探り、バッハの真意に迫る 講師: 淡野弓子
受講料 7344円(一般) 6048円(会員)
- 8) 橋本周子(聖グレゴリオの家宗教音楽研究所所長 <http://www.st-gregorio.or.jp>)
- ・8月15日(水) 18:00 於: 聖グレゴリオの家聖堂
聖母マリアの被昇天ミサ(グレゴリオ聖歌による)

- ・9月1日8日(土) 17:00 於: 聖グレゴリオの家聖堂ロビー
アントニー・シピリ(ケルン音楽大学室内楽教授) ピアノリサイタル
前売り 3,000 円(当日 3,500 円)
 - ・9月2日(日) 10:30 於: 聖グレゴリオの家聖堂
守護聖人グレゴリオ一世教皇のミサ(グレゴリオ聖歌による)
 - ・10月20日(土) 15:00 於: 聖グレゴリオの家聖堂
徳岡めぐみオルガン・リサイタル
前売り 2,000 円(当日 2,500 円)
- 9) 正木光江(お問い合わせ gzi03367@nifty.com)
- ・2018年6月15日 グイド・ダレッツォ著 中世ルネサンス音楽史研究会訳『ミクロロゴス(音楽小論)』全訳と解説. 東京: 春秋社.
- 10) 楠木(米沢)陽子 (東京純心女子大学キリスト教文化研究センター 042-692-0326)
- ・2018年9月29日(土) 14:00 於: 江角記念講堂
パイプオルガン レクチャーコンサート
ーコラール合唱とともに味わうオルガン音楽ー
J.S. バッハ 『オルガン小曲集』Vol.3 信仰生活のコラール

事務局より

第49回国際ハインリヒ・シュッツ・フェストは2018年11月1日から4日まで、チューリヒで開催されることになりました。毎年フェストを開催することが、どれほど大変な事業であるか、今回は特に強く感じます。実はスイスには支部がなく、チューリヒという話も昨年突如としてでてきたものです。会長や本部委員は様々な場所と交渉なさいましたが、合意を得ることができませんでした。そのような中でチューリヒ市文化庁、チューリヒの西洋倫理・文化財団、ヴィルヘルム・エルク・レガート氏、マリー・グレットラー財団、チューリヒ大学の御支援を得て、実現が可能となったのです。開催時期は例年と異なり、またカッセル音楽祭とも重なり、本部事務局長が欠席ということですが、委員が助けあって乗り越えようということになりました。なおチューリヒでは1963年大会に続いて二度目の開催となります。

昨年度のマールブルク大会で、開会宣言がされた大学の壁に、1529年にルターとツヴィングリが宗教論議を行い、意見を異にし、袂を分つことになる場面が描かれていました。その点からすると、昨年の大会との連続性も感じさせられます。今から500年前の1518年にツヴィングリはチューリヒに召集され、1519年1月1日からグロースミュンスター寺院で説教を始めるのです。それ以前は、素晴らしい図書館で有名なアインジーデルンの修道院附属教会で説教をしていました。そこで今回はアインジーデルンへの小旅行も企画されています。またスイスがヨーロッパの南北を結ぶ経路に位置すること、シュッツの音楽がイタリアの影響を色濃く持っていること、さらにシュッツが不寛容な宗教上の立場もその原因の一端として、ヨーロッパを荒廃に導く30年戦争の時代に生きたことを想います。そこで今回の企画者はエキュメニ

カルな考えを表に出そうとしています。アインジーデルンの修道院附属図書館見学、オルガン視察、ラテン語による晩課、シュッツの音楽に流れ込む他国の音楽の影響等に関する講演、主題に沿ったコンサート、そして勿論参加者と一緒にフォンデュを味わう夕食会等、盛沢山な内容です。スイスの高いホテル代を考慮して、参加者へは割引でホテルが予約できるよう御手配もされています。本部のホームページから [Übernachten in Zürich](#) をクリックし、さらに [Jetzt Buchen](#) をクリックすると、5つのホテルが紹介されています。そこには10月1日までに予約するようにと書かれています。例年の経験からして、まずはホテルの確保は早めになさることをお勧めいたします。現地で皆様にお会いできるのを、楽しみにしています。

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

設立 1965年3月28日

支部長 荒川恒子

会計 山下道子

事務局 〒221-0002 横浜市神奈川区大口通 137-5 荒川方

(事務一般および様々な質問、御意見、情報は荒川へ、会計に関することは山下へ)

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部 Newsletter 編集 荒川恒子 木村佐千子